
艦長と部隊長の座談会

セウル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

艦長と部隊長の座談会

【Nコード】

N4867R

【作者名】

セウル

【あらすじ】

リリカルなのはとフルメタのクロスオーバー！

一日休暇の八神はやて部隊長とテレサ・テストロッサ艦長の暇で平和な会話を収録しました。

今日は非番か………そや、あの子も暇やった。なら、遊びにいこっか。

はやてはあるところに連絡をいれ、遊びに行く。

(前書き)

キャラが崩壊するかもしれません。
主役？みんなです。

「ん……………」
眩いといわんばかりの光が、流れ込む朝……………
かけていた布団の優しい落下音で目を覚ます。
「今日は……………休日なんやっけな……………」
ぼそつと呟く。

隣では、リインが気持ちよさそうに寝息をたてていた。
いつもは仕事に追い立てられ、慌しい朝もこう静かな時間だと気持ち
ちがええもんやなあ。
とりあえず、することが無い。
なのはちゃんも教官やから忙しいし、フェイトちゃんも執務官やし……………
あの子なら……………。

とあるところに連絡すると許可をもらえ、リインを連れて行くことにした。

「はやてさん、こんにちは。」
「連絡はしとるけど、会うんは、久しぶりやねえ」
「そうですね。お互い職業柄、そう暇な時間ありませんし」
「こんにちは、テッサちゃん」
「リインちゃんも来たんだね」
「はいです。私も今日は空いてたので」

3人がいるのは、トイボックス。

本来の名前は、トウアハー・デ・ダナン、ミスリルという組織の強襲揚陸潜水艦である。

「しかし、ほんまに驚かされるで、テッサの部下達の優秀さには」「そんなこと無いですよ。はやてさんの部下も素晴らしいと思いますよ?」

「そうかな?」

「そうですね」

「今日は、テッサちゃん非番?」

「ええ。ダナンは今、整備中だから。」

テッサの部屋にいる三人のところへ、来客が訪れたのだが。

「た……大佐殿。談笑中でしたか。」

「相良くんやね?聞いとるよ?」

「は?」

「ちよつ……はやてさん!」

「はやてちゃん駄目ですよ?!」

「は……あの……」

「じょ……冗談や!だから離れてっ……」

はやての口を塞ごうと、リインとテッサが突撃。

しかし……

「きゃっ……」

「え?」

いつもの、テッサのスキルが発動して、転倒。

そのまま、はやてとリインに突っ込んでしまうという事件がおき、さらに、結構な騒音だった為、近くにいた、マオとクルツ。

カリーニンにマデューカスまで駆けつけるといいう大惨事にいたった。

「大佐殿……お怪我は?」

「軍曹!」

「は……はい。」

「ちよつと来なさい。」

「は？」

「良いからこい！」

「は。りよ……了解であります！」

宗介はマデューカスに連れて行かれ……。

軍曹は何もしてないと思うのだが……。

「カリーニンのおじ様！」

「ん？リインフォース？くんか。かわらんな。」

「おかげさまで。」

「なんや、リイン。おっちゃんを知つとつたん？」

「はい。少し前の任務でお会いしたんです。」

「へえ、少佐はロリコンですか？」

「クルツ！馬鹿なこというんじゃない！」

「姉さん……痛い。」

「私とはやてくんは何度か、任務を共同しているんだ。」

「それだけなん？私に芽生えたりせんのか？」

「はやてさん！余計なことしないで下さい！」

「テッサちゃん、怒らない怒らない。冷静になるんや」

「わ、私は、お邪魔みたいですな」

「私達も行くよ」

「姉さん引つ張らないで！」

あゝあ……行っちゃった。

リインがしょんぼりするなか、この2人は……。

「相良さんに余計なこと吹き込むの止めて貰えませんか?!」

「どつしよっかな」

「は〜や〜て〜さん！」

「なんやもう、怒りすぎやよ？」

「私が、お酒好きだとか、寝相が悪いとか、いびきかくとか！
でたらめだし、印象下がるだけなんです！」

「ん？なんや。下がっちゃ悪いことでもあるん？」

はやてがにやっと笑ってテッサを見つめる。

う……………。

く……………黒いはやてさんが……………

「ん？ん？何も言わんと解らへんよ？」

「う……………」

「ん？」

「えつと……………部隊の指揮に影響が……………」

「いいや、ちやうね。相良くんは無口やから広がることはないやろ。

そして、そんなことで、相良くんは見限ったりせえへんはずや！」

はやてが、机を軽く叩いて、人差し指でテッサを指差し、にやける。

「な……………なんですか？」

「好きやろ。相良くんのこと。」

う……………。

はやてにど真ん中ストレートを場外ホームランされ、固まる。

その間もにやついて、はやてはテッサを見つめる。

「だ……………だからなんなんですか？！」

「別に、どうもせえへんよ。私らはもう、帰るんやけど。

確か、相良くんも東京いくんやないっけ？」

「テッサちゃん頑張って〜」

リンとはやてが、部屋を出て行く。

1人、テッサが残る。

「……東京。」

「かなめさんが……」

「はやくさんに言われると、なんか悔しいけど……今を逃した
ら！」

「急いで、部屋を飛び出して離陸するへりに向かう。」

「間に合って……間に合って！」

「扉を開け放つと、丁度、宗介が乗り込もうとしていた。」

「相良さん！」

「力いっぱい叫ぶ。」

「大佐殿？」
「届いた！」

「相良さん……あの。」

「私……大好きなんです！だから嫌いにならないで！」
「言った……言っちゃった。」

「大佐殿……俺は嫌いです」
「そんな……」

「徐々に、へりが動き始め、宗介が離れていく」

「いいですかテッサ。お酒が大好きなどとは言うべきではありません
ん」

「へ？」

「お酒は脳細胞を破壊します。この仕事を長く続けたければ飲むの
はやめるんです。いいですね。テッサ」

「へりは離陸し、飛び去っていく。」

「あっ……なんですかそれ！私、未成年なんですけど！」

「飛び立つへりに、テッサの空しい言葉が飛んでいった。」

「くつくつく。相良くん。酷い子やね」

「何がですか？」

「解らんの？あいや……これは。テッサも苦勞するもんやね」

「あの……」

「ええでええで。気にせんとして。私の独り言や」

「は！」

「せやけど……」

はやてが、宗介を見つめる。

「いつかは、選ばんといけんよ？」

「は？」

「無知やからとか、そんなの関係ない。

いつかきつと、選ばんといけへんのや。覚悟……しとくんよ？」

はやては軽く微笑んで言う。

とうぜん、宗介は言葉の意味を解ることは無く。

いつかきつと……

テッサか、あの子。どっちを選ぶんか……

楽しみや。

不敵な笑みを浮かべるはやてたちを乗せ、へりは飛んでいった。

(後書き)

どうでしたか？

さてと・・・

これ実は、フルメタの艦長の割と暇な一日を参考にしてたりします。

読んでくださり、有難うございます。

感想等頂けると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4867r/>

艦長と部隊長の座談会

2011年4月21日14時31分発行